

36

プリントアウトした請求票は、所蔵部署階のカウンターにお持ちください

2011年01月13日 11:59:44

2011年01月13日 11:59:45

入館証番号:

入館証番号:

Call Slip

<請求票>

YY4687

<請求票> (控)

Call Slip

資料名: 支那の知性

巻次:

著者名: 林語堂 // 著

出版者: 創元社 頁数: 364, 2p

大きさ: 18cm 出版年: 1940

所蔵館: 多摩

所蔵部署: 多)情サービス

配置場所: 3/338 多)B2書庫有

資料ID: 1114101180

一	社	人	自	東	新	力	事
						請求	報告
MB1	マイ知	B1	アルファベット	原紙	縮刷		
MB2	マイ知	B2	洋	中	朝		
行	1F	B1	B2				
多	児	青	1F	B1	B2		

資料名: 支那の知性

巻次:

著者名: 林語堂 // 著

出版者: 創元社

出版年: 1940

大きさ: 18cm

頁数: 364, 2p

所蔵館: 多摩

所蔵部署: 多)情サービス

配置場所: 3/338 多)B2書庫有

資料ID: 1114101180

請求記号

YY4687

序 1~6
 原著者序 1~7
 目次 1~5
 本文 3~47

序

林語堂の「小評論」の譯がまさに成らうとしてゐることは、私に深い感慨を覚えしめる。それは文字通り故喜人虎太郎君の鑠心の努力になつたものであり、彼の遺著として今我々の前に置かれようとしてゐるからである。

この翻譯と私とは特別に深い因縁をもつてゐる。喜人君とは先にマジヤ問題講座の編輯同人として協力して以來ごく親しくつき合ふよになつたのであるが、かぬ／＼生活の補助の意味からも有意義な翻譯をやりたいが何かよい原書はなからうかとの相談を受けてゐた。私は去年夏、中南支を一月あまり旅行したが、その際香港、上海の書店で面白さうな本を三四冊彼のために見つけてかへつたのである。それらも或ひは今の日本では翻譯するのに多少不適當なものであつたりするものもあつて結局、この本が翻譯されることになつたのである。

序

文部省
文部省
文部省



その後時々會ふ毎にきくと進んではおるがむづかしくて困るといふことであつた。一月の終り頃私が九州に旅行しようといふ前日であつたが、支那の人名や、事情でどうしても分らない箇所があるからといつて家に訪ねて来た。いづれも厄介なもので結局半日ばかりで手許の参考書をあれこれ引つくりかへして見たが質疑の箇所は三分の一も明らかにすることが出来なかつた。それで兜を脱いで幸ひ當時在京中だつた陶晶孫君に調べてもらつたりしたのであつた。

ともかくも喜入君が社大黨の方のいそがしい仕事の中からこの難物を征服した努力には腹から佩服した。支那語や特殊事情などでも一わたり全力を盡して解明のために努力してこれを追ひつめてゐたことには驚かされた。私には彼が文字どほり骨身を削つた様が想像された。その日しばらくぶりに會つたのであつたがひどくやつれてゐることに気がついた。一しよに喰つた晝めしも腹をこわしてゐるからといつて重さうに箸をとつてゐた。彼からはその一日おいて次の日に病氣で寝ついたといふたより一週間ほどして受けとつた。

寝つていからも二度この本のごとで手紙を往復したが一度肩舞ひに出かけようと思ひながら、毎日おはたゞしい仕事に追れて果さないでゐる中にどうも三月四日の朝逝去の悲報を受けたのである。翻譯の仕事は殆んど完成してゐた。さうして最後の仕上げは彼の義兄淺野晃君によつて成就されたのである。

お通夜の夜、彼の佛壇に令息が描いた「お父ちゃん」といふ色鉛筆の繪が飾られてゐた。肩をあげてさつそつと道を行く彼、また元氣よく可笑する彼を想つた。そして今更ら林語堂がこの本が彼の生命を直接に幾らか縮めることになつたのを思つて暗然たる氣持ちになつた。彼こそはまさに始まらうとしてゐる新らしい日本の大きな時代の足音を耳ざとくもきこつて大いに勵まかうと身構へをしてゐた一人であつたと信ずる。しかも雄志を抱きながら、未だ時代の夜明けを待つことなく死んでしまつた彼を惜しむの念に堪えない。

「支那の知性」は形の上で残されたものでは彼の代表的な著作となるのである。私たちにとつては今日以後喜入君の譯したことによつて林語堂の名は特に意義深いものとなるであらう。私は林語堂に對しては特別の關心も敬意も拂つたことはなかつた。かつて上海に居る時分

彼の書くこの「小評論」をチャイナ・クリナイク誌上で時々眺めたり、又左翼作家たちに雑誌や小新聞で小づきまはされてゐるのを眺めただけであつた。ほんとに讀んだのは最近しきりに日本で翻譯されるようになってから、新居格氏の「我が國土、我が國民」、阪本勝氏の「生活の發見」、それから評判の彼の小説「モメント・イン・ペキン」の日本語譯である。林語堂のことは既に日本でもしきりに紹介されてゐるので詳しい説明にも及ばまいと考へる。本年四十六才、福建省漳州人で、上海にあるセントジョーンズ大學を出て、アメリカ及びドイツに留學、言語學が専門である。かつて北京大學で言語學を教へてゐた。その後一九二七年には武漢政府で陳友仁外交部長の下で外交部祕書となつてゐたこともある。文筆生活に入つて、「論語」「人間生」等の雑誌を主宰した。

彼の生活の本據はむしろアメリカにあり、といふ方が適當であり彼の思想なり考へ方なりには東洋的なものと同時に極めて西洋的なものがある。支那人の間では彼の支那についての説明なり、解説なりの仕方は決して純粹に支那を理解してゐるものではないと主張するものが多い。その點を全然否定するものではないが、彼が東洋（彼の場合では支那）の眞價を極

めて高く把持して、西洋人に東洋と支那の差異を説き、しかもどこか一段高いところから、「西洋人などに東洋のほんとのよさが分るものか」どころをさびてゐる點は、皮肉もありユーモアも含まれてゐて頗る好感が持てるところである。

支那の知性をほんとに理解し得るものは日本人以外には求め得られないと確信する。私個人としては林語堂の考へ方なり、生き方なりに對してあまり同感はしてゐないのであるが彼の見方や説明の仕方には大いに教へられるところがある。ともかくも支那の知性は日本の良識によつてもつとひろく諒解されることが必要であらうと思はれる。林語堂の英語は見事なものだと思はれる。しかし相當に難解であることは確かである。喜入君の語學力をもつてしても相當難澁したものと思はれる。

こゝに「支那の知性」の名を附せられたのは彼の「小評論」の第一部の全譯である。

(Lin Yutang. The Little Critic. Essays, Satires and Sketches on China, First Series: 1930—1932)

この部分は彼が最も張り切つてゐた時期であつて筆ものび／＼としてゐる。外國から歸り、

大革命の片隅にも参加して見た後で、さて靜かに見なほした時に生れて來たこの支那社會、政治に對する鋭い皮肉な觀察はまことに興味深いものである。この意味で一九三〇——三一年といふこの彼の初期の評論には特別の興味を感ぜられるのである。(なほ岩波新書の中の「支那のエーモア」はやはり「小評論」中の抜萃であるが、手許にその部分の原文が無いので確かなことはいへないが、これは時期的に見て一九三三年以後の第二卷の中の部分に相當するものであらう。茲に譯出されたものは内容的には少しも重複してはゐないのである。)

昭和十五年六月

尾崎 秀實

原著者序

ここに蒐めたエッセイは、一九三〇年六月十六日に創始、爾來チャイナ・クリティク紙の特色となつて來た『リトル・クリティク』から選んだものである。私は外遊時代（一九三二年の春から一九三三年の春まで）を除き、この欄に定期に寄稿してゐた。『リトル・クリティク』欄は強ひてエーモアなものにしようと思つたわけではないが、それに盛られた論旨と調子が輕く、取扱はれる主題が人々の問題と緊線にふれ、筆者が心置きなく讀者に語るやうなものにしようとしたのである。この欄が創始された今から五年前の最初の號に、そのエッセイの目的とスタイルと内容について次の如く説かれてゐるが、これは今日までも堅持されてゐることと、私は信ずる。

『リトル』といふ言葉はいろいろの誤解を生むおそれがあるといふことに鑑みて、形式

原著者序

的の前書を書く代りに、この誤解をとくために若干言を費さう。支那の『大』新聞の編輯者の眼からすれば、世間のすべての重大なトピックスは、ロンドン海軍會議から支那における國民運動の進展に至るまで、どこごとく彼等の獨占であるかのやうに思へることだらう。體面上、夏の天候のこと、もしくは支那の統一の重要なことを言はねばならぬ場合には、彼等はこれを言ふ。また誰れが戦争の公報を無料で再掲せねばならぬ時には、彼等はこれを再掲する。彼等が戦争のニュースの公報を無料で再刻し、配達する代りに、彼等は懸けがへのある必要なものとなることによつて、存在し且つ社會にサイザイスする特權を許される。しからに、體面なるものがこの奇妙な特權を得るため支拂ふ價格は、まったく相當なものである。クリストフ・モリは *Where the Bird Begins* (蒼天のはじまるところ) ⁽¹⁾ といふ愉快な小さな本の中で、體面はいつも犬の頸輪をはめてゐる、と言つてゐる。今では、彼等は若干の檢關係を置いて、この犬の頸輪から人間の地聲で吠えるのが餘り高聲すぎで、これら檢關係の主人たちの極度に鋭敏な神經を掻き亂しはしないだらうか、またはすべての別荘と役所の界限が丁度ベツトに就かうとしてゐる時に吠えはしないだらうかと、取締りをする

ほびになつてゐる。勿論、その正味の結果は極めて不面目なものである。かういふ低い聴きとれないやうな涙聲や甘へ口は、實際犬人には似つかはしくないのであるが、今では彼等は人間らしく「畜生！」と發音する能力をすら失つてゐる。我々は大聲で吠え立てよといふわけではないが、もつと人間らしく吠えようではないか。結局のところ、人は犬の頸輪と糊の硬いシャツを脱いで、パイプ片手に爐邊に臥せるときほんどに人間的な存在となることが出来るのだ。このボタンを外した氣分で我々は語ることにしよう。

ここでは世間への禮儀のために、編輯者たる『我々』といふ言葉が用ゐられてゐるが、私と思ふにこれは最も不適當である。速かにそれはやめて、個人的な『私』といふ言葉が愛用されねばならぬ。このやうな小さなことが至極重要なのである。これを『我々』は考へざるを得ない。かれを『我々』は信ずるに足る』といふ場合、個人的たるは困難である。しかも讀者とほんどに心を打明けて語るためには、人は個人的となり、或る程度の自己無意識を持たねばならぬ。

實はこの『私』をのべつに使用することは幾らか危険であり、時としては、一人の心の中

で考へ且つ感ずることを全世界に向つて語るとは、如何にも圖々しいやうにも思はれた。しかし私の讀者は寛容であつたから、私も勇氣を得て私の一個の思想と意見を公けにしつづけたのであるが、一つの思想はまた次の思想を生む。私は餘り私自身の思想に没頭しすぎたので、たちまちにして、我々は訓政期にあるのか、尙ほ未だ軍政期にあるのか、それともすでに憲政期に入らんとしてゐるのか、忘れてしまつた。たちまちにして私は朝の新聞をまつた慣く讀まない習となり、四全大會が延期されたのかされないのか、海軍部長が三年計畫を擱てたのか五年計畫を擱てたのか、昨夜汪精衛が北停車場に着いたのか着かなかつたのか、分らなくなり、したがつて國家の大事を論ずる資格を全く失つてしまつた。しかしながら私は尙ほ毎週何か書かねばならなかつたので、自然私の知つて居ることに落ちつき、そこで『私はどうして齒刷牙を買つたか』とか、『我が庭の春』とかについて書きはじめた。そして今この時分の不用意な述作の跡を顧みて、『四全大會』とか『汪精衛の北停車場到着』とかについて書かず、その代りに齒刷牙の話を書いたことを欣びとする。といふのは、齒刷牙は齒刷牙であつて一九三五年も一九三〇年と同じであるが、讀者諸君も四全大會が何のことであ

押しつよく期待してゐるのである。

私がこれらの述作を一冊に蒐めたのは、別に理由あつてのことではないが、私自身にとつて都合がよいので、これを出版してくれる書肆を見つけてこれが出来たので、それからこの輕い諷刺文が時に私の友人たちを喜ばしたからである。Stijn Nizig 施耐庵が水滸傳の『序言』中に述べたといはれるとほり、『噫、人生は短く、後の世の人がこの書を如何に考へるであらうか、知るに由ない。私の知ることとは我が友人たちがこれに興じたといふことだけであるが、しかも私はそれで十分である。私自身でさへ、次の世に生れたとき、これを如何に考へるであらうか、それとも抑も次の世でこの書を讀む機會をすら得るであらうか、知るとは出来ないので。何のために思ひ煩らうことがあろう？』私はそれがセンスとチンセンス物で、或るときはセンスがチンセンスに勝り、また或るときはチンセンスがセンスに勝るこの混合とを知つて居る。もしも私の友人たちがこれに興じたといふなら、それで十分だ。そ

して更に喜ばしいのは、これが多くの友人を、Chang Ch'iao⁽²⁾のいふ如く、遠くからだけしか知らないが凡ゆる手段をつくしてすべての流説を防いでくれる友人を、續いてつくつてくれることである。

これらのエッセイとスケッチ並にいろいろの機会に試みた講演を整理し直すに當り、私は終始一貫餘りに『時局的な』トピクにふれたエッセイはすべて除くにとめた。そこで自然、ここに入れられたのは、誰れでもの問題（たとへば『支那文化の精神』、誰れかの問題、『エホザラの學識』、並に誰れの問題でもないが私自身の問題であるもの）『どうして私は棟制長屋に引越したか』及び『かつて私は車を持つてゐた』といふ大きな自然の範疇にはまつて来た。誰れもが誰れのもない問題を讀むだらうと私が考へるだけ、誰れも誰れでもの問題は讀まうとしないだらう。私は體系的な分類といふものを實際的な價値がないと考へたので、平凡な『エッセイ』、『サタイヤ』、それから『スケッチ』といふ分け方を選んだ。順序は何の意味もない。すべての聰明な讀者諸君は順序通りに讀むやうなことはなからうと思ふ。それは讀書の最も悪い方法だ。私のお薦めするのは、『スケッチ』は全くのナンセン

スだから旅行のときに讀むこと、『サタイヤ』は會議で論者が長廣舌を揮つてゐる時睡氣がましに讀むこと、而して『エッセイ』はこれと正反對に睡氣を誘ふために讀むこと。そこでこの目的のためならば、安んじてこの書をベッドや枕の上で用ゐるに推薦出来るであらう。

著者

(1) Darlington Christopher Morley (1890—) アメリカの詩人にして小説家。

(2) 張翹であらう。

第一部 エッセイ

目次

支那文化の精神……………三

支那の民衆……………三七

婦人の結婚と生涯……………四六

婦人への警告……………五九

序 原著者序

尾崎 秀實

政治家の病氣について……………一六一

南京蟲は支那にゐるか……………一六八

もし私が匪賊だったら……………一七五

如何に文章を書くべきか……………一八五

顔とは何ぞや……………二〇一

私は婦人と語るを好む……………二〇九

國際聯盟を奉むるの癖……………二一七

私は如何にして歯刷牙を買つたか……………二三四

犬肉將軍の追憶のために……………二三三

私は人殺しをした……………二五九

第二部 サタイヤ

近代支那の瘡癩としての韓非子……………二七

孔夫子の一面……………六七

支那人のリアリズムとエウモア……………一〇三

政治家にもつと牢獄を……………一四

自由主義とは何ぞや……………一〇

チェンスタインの確信……………三五

支那の名前について……………四

アメリカの一友人への公開状……………一四

死亡通知について……………二四六

キング・ジョージのお祈り……………二五三

上海に寄せる讃歌……………二六八

ツアラツストラと道化……………二七三

衣裳のページェント……………二七〇

エボヅアの學識……………二六八

第三部 スケツ・チ

私のバウス・ボーイ阿風……………二九二

私の見た南京……………二九六

かつて私は車をもつてゐた……………三一一

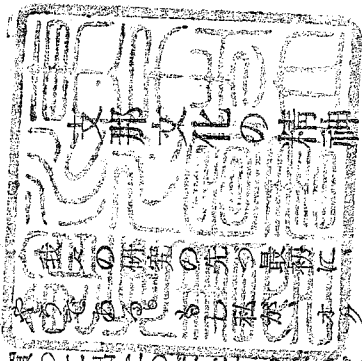
手に汗にぎるバス旅行……………三二三

ニコチン夫人に對する私の最後の叛逆……………三三三

私は如何にして棟割長屋に引越したか……………三四三

喪はれたる官人……………三五〇

私は如何にして徳望を得たか……………三五八



このディスカッションの目的をはつきりさしておくことが望ましい
オクスフォードの學生を改宗者にするため支那文化の使徒たる役割を
買つて出たのだとするならば、私は甚しい非支那人のわけである。あまりに宣教師的な熱心さ
といふものは、隣れむべき常識缺乏を意味するのであり、常識を缺くといふことは、支那人に
とつては教養不足の十分な證據なのである。それ故に、私が諸君に支那文化の精神を説かうと
してゐるのも、福音を傳へるといふ熱意は固より全然なく、特有の無頓着さをもつてするだけ
である。

私は、或る國の文化といふものは、多かれ少かれ民族的氣質の結果であると考えてゐる。或る種

の文化的理念は民族または國民の思想を變化させるが、根本においては國民の精神的並に感情的構造は依然としてもとのままである。かかる外來の文化的理念は國民に押しかぶせることは出来ようが、その奥深い本能と諧調しない限り、その國民の生活における眞の要素とはならなからう。近代の血液混交はかかる過程の限界と個人反應の重要さを我々に教へた。それがしばしば行はれると、民族的氣質が文化的理念を變化させるのである。たとへばチエートン人は立派な尚武の民族である。猶太的宗教への二千年の信仰も彼等の好戰的な氣質を見るほどにも變化させなかつた。今日、ヨーロッパ人が支那に來て支那人に基督教の愛と基督教の謙讓を教へるのは、支那人が英國に使節を派して英國人にクリケットを教へるほどにも滑稽なものと、私には思はれる。我々が計算に入れねばならぬのはこの民族的下層士、即ちその精神的氣質である。この驚異の支那文化が諸君にとつて何かの價値があることを示唆しようより、むしろ私は諸君に、これを支那人の人間の氣質の研究であると考へていただきたいと思ふ。そこにこそ支那文化はその眞の解明を見出すのである。

だから私は、我々ははるかにもつと價値ある目的を、即ち支那人の民族的氣質を理解し、支

那人の心理と支那人の文化的傳統の根柢に到達せんとする目的をもつことになる考へる。また私は支那文化の眞精神を把捉したならば、それを奇異に感じたり、不可解に感じたりすることはなからうと考へる。我々はこの文化について、多くの人文主義の學者が古代希臘を美化したと同様に、支那崇拜者の夢想する理想的な完全さを發見するといふわけではなく、また『文明』とサーティンをもたらしてくれた西洋の貿易商人の恩を忘れた匪賊と人殺しの國民を發見するといふわけでもない。このどちらの見方も極端であつて、眞の理解を缺いてゐる事から生ずるのである。之に反して我々は、極めて人間的な哲學をもち、多くの長所と同時に同じく多くの短所をもつところの、極めて人間的な國民を發見するだらう。實際我々は、支那人が結局のところ全くノーマルで、かつ極めて人間的であるといふ驚くべき發見をすることにならう。彼等は常識を愛するといふ點において、論理的極端を嫌惡するといふ點において、生活に對するほとんど女性的な本能において、それから『どうにか切抜けて行く』といふ偉大な能力を有つてゐる點において、英國人よりも人間的でさへある。支那はどうにか四千年の間を『切抜けて』來たのであるが、定見堅固の希臘人と論理的な羅馬人とは風の昔に滅びてしまつた。もし

も英國人が『どうにか切抜けて行く』といふこの能力を保持して行くならば、私は、彼等に今後四千年の國家的偉大さを樂觀してもよいことを保證し得る。生活に對する女性的本能は支那を保全して來た。そして生活に對する女性的本能は英國を保全せんとしつゝある。

このどうにか切抜けて行く能力の大切な効果を諸君に首肯させるには、おそらく實例を示すべきであらうが、それはラムゼイ・マクドナルドの生涯に最もよく現はれてゐる。ラムゼイ・マクドナルドは、スコットランド人ではあるが、偉大な英國人である。多年の労働運動家であつたマクドナルドは、ダウニング街十番地⁽¹⁾の階段をのぼり、傳統の空氣を嗅いで、幸福を感じた。そこで彼は甚だ派手に轉向し、多年の主義を風に吹き飛ばして、ケンジントン公園のロンドン鷗に食はしてしまつた。昨年、彼は、差迫る財政的破綻から英國を救ふため、彼の労働運動家としての主義をことごとく海中に投じ、労働黨を分裂させた。もし彼が轉向しなかつたらば、英國の財政は破綻し、英國は金本位離脱の止むなきに至るべらうといふことであつた。ところで、彼の變説にも拘らず、英國は金本位を離脱した。だがその結果は？ 英國は破滅すべしどころではなく、金本位の拋棄によつて英國の商工業は着々と建直され、利益を擧げた。マ

クドナルドはどういふわけで彼がさうしたのか知らなかつた。英國中の誰れ一人として、どういふわけで彼等がさうしたのか知らなかつたのだ。しかし英國人は、すべての經濟理論を無視して、も一度頭張つたのである。諸君はラムゼイ・マクドナルドの僞信を責めることは出來ない。彼は僞信といふのではなく、ただ英國流に無定見であるといふにすぎないのであつて、それは堂々たる態度なのである。無定見は缺點ではなくて美德であることを記憶せよ。キケロは曰く、『定見は小人の美德なり』と。論理的なフランス人が英國人または支那人の無定見を責めるとすれば、彼はただ彼の人間哲學に關する無知を示すものにすぎない。定見といふ單なる問題は、それだけで我々を困惑せしめるに足りない。

しかし英國人と支那人の資質の本質的類似性については、後に論ずることとしよう。私は先づ、支那人は極めて人間的な國民であり、支那文化は極めて人間的な文化であるといふ觀點を確立したいと思ふ。それは老人の文化、即ち寛容で、ユーモラスで、平和でかつ満ち足り、圓熟した智慧と老年の弱さを伴つてゐるが、しかしその場合にすらむしろその弱さを變ずるといふ文化である。支那に對する西洋の侮蔑の多くは、短氣な若い改革者が『老人』に對してもつ

それであり、他方西洋に對する支那の惱みは、生活といふものの大概を見て來てその歸するところを知つてゐる老人が、この若い利口な人間に爐邊の安樂椅子から引摺り出され、九月の朝に海水浴をさせられるといふ、それである。諸君はあそらくすでに、私が何故西洋の若い哲學者に老人の穩かな哲學を強ひようとさへしないか、おわかりのことであらう。危険なのは、老人は九月の朝に水に漬かる戯れを解するだけの常識を具へてゐるが、若い者は爐邊の居心地よい場所の麗しさを解するだけの常識がないといふ點である。どちらが幸福かと尋ねることは、明らかに馬鹿げてゐる。もし諸君が眞に支那人であり、そして人間であるならば、『雙方ともに、可なり幸福であり、そして可なり不幸である』と答へるだらう。

もし我々が支那人の本性を檢討すれば、我々は一團の特異な性格を發見するだらう。借方の側には、政治的腐敗、社會的訓練の缺乏、科學及び技術の遅れてゐること、思想及び生活の或る部面における極端な幼稚さ、俗慾の多いこと、それから餘りに妥協し易い性向を擧げねばならぬ。貸方の側には、歴史的持續、文化的同質性、美術（詩歌、繪畫、陶磁、建築及び書道）の高度なる發達、極端な生活力と耐忍、ユーモア、知性、學者に對する尊敬の念、單純さ、強

い自然愛、家族愛、それから生活の眞の目的に關する正しい觀念を擧げねばならぬ。中間の性質としては、一般的な保守性、平和を好むこと、寛容なること、並に極端な現實性を擧げねばならぬ。これらはみな健全な性質なのではあらうが、しかし保守性は當然進歩を遅らすのであり、平和を好むのは戰鬥に對する生理的な反感から來るのであり、極端なる寛容は美德といふよりもむしろ缺點となるのであり、而して現實性は理想主義的な冒險に概して執中出來ないことを物語るのである。諸君は、これらのすべての資質が、善なるも惡なるもまた中間なるも、多かれ少かれ消極的性質を帯びてゐること、そして事業と進歩のためといふよりも、むしろ平和と持久のために建設せられた文明を示唆することを看取されるだらう。私はこれらの資質を『圓熟』mellowness といふ言葉で一括しようと思ふ。

この多くの民族的並に文化的特質の中で、我々は如何にすれば、この民族的性格の本源と本質とを我々に理解せしめ得べき支那文化の眞精神を發見出來るであらうか？ 私は支那のヒューマニズムを解明することが、この精神を最もよく説明する方法であると思ふ。といふのは、支那文化の精神はヒューマニズムの精神なのであるから。

『ヒューマニズム』といふ言葉は實に甚だ茫漠としてゐる。しかしながら支那のヒューマニズムは、私の考へるには比較的新しい成語であつて、極めて明確な語義をもつてゐる。即ちそれは、先づ第一に、人間生活の眞の目的に關する正しい觀念を意味し、第二に、この目的に完全に執着することを意味し、第三に、この目的を達するに人間的合理性の精神、即ち中庸の教義、または常識の宗教とも稱せらるべきものによることを意味する。

支那のヒューマニストは、生活の眞の目的を發見し、そしてそれを意識してゐると信ずる。支那人にとっては、生活の目的は死後の生命には存しない。何故なら、基督教の教へるやうな死ぬるために生きるといふ思想は不可解である。また涅槃にも存しない。何故なら、それは餘りに形而上學的である。また事業完成の満足にも存しない。何故なら、それは餘りに驕慢である。尙ほまた進歩のための進歩にも存しない。何故なら、それは無意味である。この目的は、支那人が不思議に明確な態度で決めてゐるのであるが、素朴なる生活、特に家庭生活の享樂に存し、また調和せる社交的な親族關係に存するのである。

支那の童子が最初に教へる詩に斯ういふがある。

晨朝微風は輕雲を浮べる、
 河に流るる花片にひかれて私は逍遙する、
 人はいふ、かの興じたる老人を見よと、
 人は吾が魂が幸福に充てるを知らない。

これは支那人にとっては、楽しい詩的な情調をそのまま現はしたのではなく、生活の *summum bonum* (最高善) を現はしたものである。それは、野心的でもなく、また形而上學的でもなく、だがしかし途方もなく現實的な生活に關する理想である。それは、私に言はずと、目ざましく素朴な理想であり、目ざましく素朴であるので平凡なる支那人の心だけがそれを解するにすぎないのであるが、しかも我々は、しばしば、どうして西洋人はそれを見落すのだらうと不思議がるのである。支那とヨーロッパとの相違は、ヨーロッパ人は多くの物を手に入れ且つ作り出す大きな能力をもつてゐるがそれを享樂する能力は餘りないのに反し、支那人はそれをもつてゐるだけの僅かな物を享樂する能力と決意が大きい、といふ點にあるやうだ。

これは支那文化の最初の祕密の一である。それは『幸福とは満足することにある』（知足常樂）といふ支那の哲學である。それは支那人の生活にある變な獨善、即ち満足し切つてゐるやうに見えて、おそらくもつと善いものではあらうが疑はしいものには、決して急いで飛びつかないといふ態度を説明する。だからそれは西洋的精神のせはしなさと思議な對照をなす。といふのは、支那人は本質的に實際的な心構への人間であるから、本能的に先づ、このすべての進歩の前途は何處で、その目標は何かと訊ねる。かつて一人のアメリカ人が支那の紳士に對して、鐵道の或る新線が竣工すればニューヨークに旅行するのに一分の節約が出来るといふことを説明したことがあるが、その支那紳士は慇懃に訊ねて曰く、『貴下がその一分を節約されたら、それを何うなさらうといふのですか？』と。これこそ、私の思ふに、支那人の氣質の典型である。『何に』並に『何の爲に』と訊ねるこの善くない習慣は、甚だ穩かならぬことにもなる。かつてパンチ誌がこの善からぬ、むしろ支那人的な質問を、英國人にふさはしいスポーツに關する英國の諺について發したことがある。パンチ誌は訊ねる、Fit for what? (何にふさはしいのか。) 私の知る限り、その質問は今も尙ほ答が出てゐないのであるが、誰れでもが

満足するやうな答の出るまでにはまだ時がかかるだらう。或る皮肉屋は訊ねて曰く、もし我々が毎日の生活のために何をしてゐるかを知つたならば、我々はそれを一體爲すだらうか、と。我々は婦人の解放について語るを好み、かつ彼女等を自由にするを好む。支那の紳士は爐邊の安樂椅子に埋まつておそらく訊ねることだらう、『何の自由か』と。この種のヒューマニストの冷靜は、兎もすれば女性の熱意を挫きやすい。そこで我々は、同じ質問を一般の公共教育と識字者の増加について發してもよきだらう——『何のために』と。その答へは、デーリー・メールその他ビヴァブルック卿の新聞を多數の人間が讀めるやうにするためだといふことであらうか？ かかるヒューマニストの氣質なるものは、一般に熱情の缺乏と保守性とを證明するものだといふことに、私は疑ひを持たない。しかし、では、支那のヒューマニストとヨーロッパの人道主義者と孰れが正しいかである。

支那のヒューマニストが彼等の信ずる生活の眞の目的に執著すること、そしてこれに關係のないあらゆる神學的または形而上學的空想を完全に無視することより甚しいものはない。我が偉大なヒューマニスト孔夫子が死の大問題につき訊ねられたとき、彼の答へは、『我々は生を

すらよくは知らない、どうして死を知ることが出来よう⁽³⁾』といふのであつた。或るアメリカの長老派教會の牧師が、かつて私に、太陽は漸次そのエネルギーを失ひ、數百萬年の後には、おそらくこの遊星に生命は絶滅するに至るだらうといふ周知の天體理論を引用しつつ、不死の問題の重要性を納得させようとしたことがある。牧師は訊ねて曰く、『だからあなたは、結局不死の問題が大事なことを認めませんか』と。私は、正直のところ平氣です、と答へたのであつた。もし宇宙がこれから五百萬年も存続し得るなら、私はもう十分に満足する。もし人間の生活がこれから五百萬年もつづくなら、それは實際的な目的には十分こと足りるのであつて、それ以上は不必要な形而上學的な思ひ過しである。それに、誰れの靈魂にせよ五百萬年以上も生きてがり、しかもそれで十分満足しないとは僭越至極だと私には思へる。長老派教會の牧師の心配は、私の無關心さが特徴的に支那的であると同様、特徴的にチエートンのなのである。だから支那人は基督教改宗者としては甚だ貧弱であり、改宗するとすればことごとくクェーカー派になつてしまふ。といふのは、これが彼等に理解の出来る唯一の基督教なのだから。佛教そのものも、教養ある支那人に吸収されると、一種の心理學の體系にしかならなかつた。宋哲

學の本質が即ちそれなのである。

人間的合理性といふ精神は、支那のヒューマニズムにおいて最も大事な教へである。人間は推理する reasoning 生物ではあるが理性的な reasonable 生物ではないと言つたのはアリストートルであつたらうか。支那人の哲學はこれを採用してゐるが、しかし人間は單に推理するだけでなく、理性的な生物たらんと勢力しなければならぬといふのである。支那人にあつては理性的であるといふ事は理性よりも高い水準におかれる。といふのは、理性はつねに抽象的であり、分析的であり、理想的であり、そして論理的極端に陥り易いが、合理性の精神、すなはち常識はつねに現實的であり、現實と密接にふれて居り、眞實の狀態をほんとに理解し評價するのであるから。この合理性の精神は二つの要素から、即ち情と理、または人情と天理とから成る。西洋の思想家は道理だけを勘定に入れるが、支那の思想家はつねに『人情』と『天理』といふ二つの要素を勘定に入れる。西洋人にとっては、前提が論理的に正しいといふことで普通十分なのである。支那人にとっては、前提が論理的に正しいといふだけでは不十分なのであつて、同時にそれは人情に適つてゐなければならぬ。實際、近情(人情に適ふ)といふことは、

單に論理的であるといふ以上に大切なことなのである。支那人は道理に反することを敢て厭はないが、人情の光に照らして感心せぬことは受け容れようとしぬ。この二つの要素のこの不可思議な錬金術から、支那人の人間の行爲のすべての動機は跡づけられるのである。

したがつて人間の合理性といふこの精神は主として直観的であり、実際には英國人の常識と同じである。事實、すべての支那人は常識宗の信徒であると言つてよい。支那人の古典教育の目的は、從來つねに教養の見本としての理性的な人間を養成することであつた。教養ある人間は、就中理性的でなければならぬ。理性的な者はつねにその常識、中庸と節制を愛すること、並に抽象理論と論理的極端を惡むこと、をもつて特徴とする。常識はすべての普通人のもつてゐるところである。この常識を失ふといふことがアカデミックな學者の危険である。アカデミックな學者は理論の行過ぎに陥り易い。理性的な人間、即ち教養ある支那人は理論と行動のすべての行過ぎを避けねばならぬ。たとへば、歴史家フルードはヘンリー七世とアラゴンのカザリンとの結婚を純然たる政治的理由によるものと言ひ、他方クレイトン僧正は全く動物的な感情に基くものと主張するが、しかし常識的な態度は雙方の考へ方が有力であるとなすのであつ

て、おそらくはそれが眞正に近いだらう。バートランド・ラッセルは如才なく指摘して曰く、『藝術においては彼等(支那人)は精妙なるを期し、生活においては理性的なるを期する』と。私は思ふに、これは極めて鋭敏なる觀察である。

常識の宗教は支那では中庸の道と呼ばれる。理性的な者、即ち常識を愛する者は誰れもが極端を避ける。英國では『理性的』といふことがしばしば『洋外な要求をしない』ことと同義語に用ひられる。人に向つて『理性的であれ』と言ふのは『多少人情を斟酌せよ、餘り人を押しつめるな』と言ふに同じい。ピダマリオン⁽⁶⁾の中の花賣娘の父親ドリトルがヒギンス教授をつかまへて五磅紙幣をねだつた時、彼の訴へはかうであつた、『理性的になつて下さい、あなたが私の娘をお宅につれて行かれるとすれば、私は娘の父親として何處に参りませう。』諸君がお分りの通り、理性的な訴へといふものはつねに人情への訴へ、この場合には娘の父親としての彼の感情への訴へ、である。かく絶えず理性的なものに訴へることによつて、支那人は妥協の能力を發達させた。そこから中庸の教へが生まれた。或る英國の父親が、その息子をオクスフォードにやるべきか、ケンブリッヂにやるべきか、決斷し兼ねる場合、バートミンガムにやるこ

とにして鳥をつけたとする。そこでその息子は、ロンドンを發つてブレッチレイに至り、東の方ケンブリッジへも向はず、西の方オクスフォードにも向はず、眞つすぐに北の方バーミンガムに赴くとすれば、これが即ち中庸の道を行ふことに外ならない。バーミンガムへの道は若干の功績をもつこととなる。彼は眞つすぐに北行することによつて、オクスフォードをもケンブリッジをも怒らせないで済む。もし諸君が中庸の教へのこの適用を理解したなら、共和國建設以後の支那の政治のすべてのやり方を理解出来るだらう。

支那人の合理性の精神、並にそれから生ずる論理的極端に對する憎惡の望ましからざる影響は、民族としての支那人が制度に信用を置くことが出来ないといふことであつた。といふのは、制度、機構といふものはつねに非人間的であり、そして支那人は非人間的なものは何でもこれを惡むのだから。法律及び政府に關する機械的な見解をにくむことは甚しいものがあつて、支那には法律による政府を不可能ならしめたのである。峻嚴な、嚴刻に法律的な政治、または實際上非個人的な法律の運用といふことは、支那においては從來つねに失敗であつた。その失敗した所以は、民衆がこれを好まなかつたからである。法律に基く政府といふ觀念はすでに紀元

前三世紀の思想家たちによつて提案されかつ展開された。それは驚歎すべき有能な行政家であつた Sheng Yang (商鞅) によつて試みられたのであるが、結局商鞅は彼の能力の代償として生命を失はねばならなかつた。それは、漢朝の初期にも一時試みられたが、間もなく中止された。それは甘肅の如何はしい蠻族の國であつた秦で施行され、この國を非常に有能な戦争機械に仕上げ、そして全支那を征服するを得しめたのであつたが、これを大衆的に支那の民衆に適用するや、三世紀ならずして慘めに亡んでしまつた。長城の築造は甚だ有効であつたが、餘りに非人間的で、秦始皇はその帝國を賭することとなつたのである。他方支那のヒューマニストは人格的な政府、紳士の統治を説き、そして支那の民衆は從來つねにその影響下にあつた。紳士の統治とは、これ誠に大膽なる思想である。それは世界を統治して廻るだけの紳士たちが揃つてゐるといふことを假定してゐる。しかし私は、それもデモクラシーの理論、即ち平凡人の統治といふことに比すれば、左ほど大膽であるとは考へない。これはまた、自分自身の生活の始末さへ出来ない平凡人が、他人の生活を支配するといふ大きな仕事を爲し得るといふことを假定してゐる。紳士の本來の統治といふものは理解出来るし、またそれは理性に適ふに反し

て、平凡人の本来の統治、即ち本来のデモクラシーなるものは生活するに耐へないものであらう。雙方の制度は共に明らかに不完全なのであるが、しかし人格的な制度の方が、つねに支那のヒューマニストの氣質と、支那人の個人主義と、支那人の自由を愛する氣持に適つてゐたやうである。

しかしこの合理性の精神は、支那人が西洋型の政府をつくり出すのには邪魔になつたけれども、他方それは、個人の自由と個性とが廣汎に許されるといふ文化の一つの型をつくり出した。即ちそれは、平和を愛し、他人に干渉せず、支配と自己主張とを欲せぬといふ文化の型をつくり出したのである。生活の稜角はかくして、多かれ少かれ、この節制と謙抑の愛好によつて火闘をかけられた。この文化は平和的である。何故なら、理性的な氣質と好戦的な氣質とは對角的に對立するのであるから。理性的な人間は、出来ればつねに争闘を避けようとし、強く迫られない限りは戦はない。彼はむしろ妥協の能力を働かせようとするのであるが、時としてそれは西洋人から見るとほとんど怯懦に近いほどのものとなる。支那人の争論に當つて普通つねに相手方に浴せられる有力な非難は「不講理」即ち理性に合はぬといふのであつて、それは、

すべての禮儀を辨へる人間は理性に従はねばならぬ、といふことを假定してゐるのである。争闘や争論における場合と同様、すべての正常な人間の交際においても、理性的精神の心髄は、『正義は慈悲をもつて和げられねばならぬ』といふあのポーションの叫びに代表されてゐるところの、『生き而して生かしめよ』の哲學の一種である。支那の將軍がその敵將を負かした場合、西洋のジャーナリストには理解の出来ぬやうな理性の型を示す。敗將を容易な業たる流刑または禁錮、乃至は斬首に處する代りに、彼は概ねその軍隊を歸順させるための手段をとり、横濱もしくは巴里行の一等船室を契約し、數萬弗の旅費を與へて何かの國際的會議の正式代表に任命する。ここに顔を立てるといふ原理がはいつて来る。何事が起らうとも人の顔は立てねばならぬといふのが支那人の信念である。顔を立てるといふこの原理と對になつてゐるのが、運命の小事は絶えず廻つてゐて、すべての幸運を何時までも握つてゐる者はない、だから人を餘りに追い詰めることは結局馬鹿を見るといふ、舊時代の智慧である。そこで實際に、紛争にはいることを嫌がり、いつでも仲直りをしようと構へてゐる、極端な型の平和を愛する氣質が生じて來るのである。したがつて教養ある支那人は、自己を主張しすぎること、または人を壁に押

しつけることを極めて悪いこと、そして賢明ならざることと考へる。これは敵に對して、『退却の餘地を興へないこと』(不留餘地)だと言はれる。そして敵に退却の餘地を興へないことは、教養即ち我々の言葉によれば、涵養の不足してゐる證據である。したがつて支那人にしたがへば、ヴェルサイエ條約は政治家的見識を缺いてゐるのみでなく、極端な愚昧味である。もしフランス人が支那人の所謂涵養、すなはち教養をもう少しばかり多くもつてゐたら、今日枕を高くして安心出來たであらう。

しかし私はまた、支那人の合理性の精神なるものは、ギリシヤ人の溫柔及び明智とも、乃至事實西洋の如何なるものとも、共通するところはほとんどないことを指摘しなければならぬ。それは若干俗世を超えたものである。即ち常識の宗教である。たしかに中庸の道に關するアリストートルの教へと孔子の教へとは多くの共通するところがある。しかしギリシヤの思想様式が近代ヨーロッパ思想に近似し、支那思想がこれから乖離してゐることほど明らかなことはない。ギリシヤ人は論理的にそして分析的に思考するが、支那人は綜合的にそして直觀的に思考する。この常識の宗教は論理的な理論に對する嫌惡と、それから直觀的な、ほとんど女性的

ともいふべき思考方法を含蓄してゐる。といふのは、諸君は直觀なるものが、論理的推理を明らかに、もしくは周知の如く缺いてゐるといふ點において、女性の獨占的繩張りに屬するといふことを銘記しなければならない。この婦人の直觀能力なるものも、モンテ・カルロの周りに群がつて、ポケットに一フランでもあれば當てようとしてゐる年寄りの、昔は鳴らした、婦人が相當にゐることに徴すれば、全く怪しげなものではある。しかし支那人と婦人の思考には他に近似點がある。婦人は生活に對する確實な本能をもつてゐるが、支那人がまたさうである。婦人の論理はひどく個人的であるが、支那人がまたさうである。婦人は魚類學の教授を魚類學の教授として紹介することはなく、彼女がニューヨークにゐた時分印度で死んだハリスン大佐の義兄弟として紹介する。同様に支那人の判斷も、少くとも普通は、法律を抽象的な全體として考へることはなく、黃大佐もしくは郭將軍といふ人間に合はして考へる。もし黃將軍と法律との間に紛争があつたとすれば、通常負けるのは後者の方である。

近代のヨーロッパ諸國の中では、常識に信頼を置く點において、また物事を處理するに大體の見當をもつてゐる點において、私は英國人が一番支那人に近いと思ふが、しかし英國人が制

度に對してはるかに尊敬を拂ひ、そして事實それに大いに成功してゐること——見よ、英國の銀行制度を、保險制度を、英國の郵便局を、それからアイルランドの競馬における賭金傳票の計算制度さへを——は違つてゐる。しかしそれでも尙ほ、實際的な常識と超論理の能力に關しては、英國人は虹の橋をかけてそれを不安なく渡ることが出来ると思はれてゐる。英國の歴史を研究して何よりも私を驚歎させたのは、英國人のつぎはぎ細工のあの傑作たる英國憲法であつた。明らかにそれはつぎはぎ細工にすぎないが、しかしそれでもそれは、フランスまたはアメリカにおけるよりもよく、この國民のために、市民的自由を保護する能率のよい機構とデモクラシー本来の型を何らにか保存してゐるのである。而して、オクスフォード自體、怪物のやうに非論理的な聚合體であるのに、世界における最も立派な學園たるを妨げないといふことを諸君に想起して戴きたい。しかし諸君の見られる如く、この點で並行線はずでに停止する。といふのは、かかる偉大な制度が年月を経て發達せしめられ得るのは、制度に對する信念の堅持によるのであるから。支那人はこの信念を缺いてゐる。支那人は二千年も前に一の政治哲學を展開し、完全に流動的な政府機構を伴ふ非能動的な統治者をもつて理想としたほど聰明であつ

たが、支那人の制度に對する信頼はこれを實現するに足りなかつた。英國においては、非能動的な統治者——即ち諸君のキングによつて現はされる——を伴ふ完全に流動的な政府機構が極めて成功であることが、今日明らかにされてゐる。これらすべては、除外例が即ち原則であること、並に支那人の常識の宗教は事實世界に類のないことを示すものである。私は、もし英國人が、生活を享樂しもしくはこれを觀照する大きな能力を支那人から學び、そして支那人が制度に對する大きな信頼を英國人から學ぶならば、兩國ともに裨益するところ多大であらうと信ずる。(一九三二年二月二十三日オクスフォード大學の平和主義グループにおける講演)

- (1) 即ち首相官邸
- (2) 論語先進篇に季路に答へて「未だ生を知らず、焉んぞ死を知らんや」とある。
- (3) James Anthony Froude (1818—1894) オクスフォード大學史學教授
- (4) 原文にはヘンリー七世とあるも、アラゴンのカザリンと結婚して政略結婚を云々されたのはその子ヘンリー八世である。多分原著者の記憶違ひならん。
- (5) Mandel Creighton (1843—1901) 有爲な宗教家にして歴史家。

- (6) Pigmalion ベーナード・ショーヴの小説。
 (7) 「ゼエニスの商人」第四幕第一場(法廷の場)の臺詞。

支那の民衆

ナポレオンはかつて支那の民衆を眠れるドラゴン dragon と言つたことがある。私は何ら
 いふ意味でナポレオンがこの比較をしたのか正確には知らない。もし彼が英國人であつて我が
 國民の『ドラッグ・オン drag on』(ダラダラと遷延すること)の能力を意味したものとすれ
 ば、彼は全く正しいわけであるが。ドラッキング・オン、または新語をつくつてドラゴニン
 グ dragoning といふことは、たしかに我々の特徴であるらしい。といふのは、如何なる國民
 にせよ、四千年の間ドラッグ・オン、すなはちノラクラと時を過すことの出来たものは他にな
 いのだから。これを別とすれば、この比較は少しも正確ではない。雙方に共通する唯一のこと
 は、ドラゴンと支那の民衆との雙方に若干神祕的なものがあること、そして雙方ともほとんど

支那の民衆

知られて居らず、沈んや理解されてゐないといふことである。動物學者にして我々にドラゴンの正體を示し得た者は今までになかつたが、私は支那の民衆を世界に解明し得た者もこれまでにあつたかを疑問とする。

もし私が世界旅行家であつて上海に立寄つたのであつたとすれば、私は躊躇するところなく支那人は偉大な民衆であると言ふだらう。偉大であるとは誤解されることである。我々が人を偉大であるといふ場合、それはその人を理解する能力がないことを意味する。ここに一人の支那人がある。多分は洗濯夫か人力車夫であらう。その顔は別に活氣もなく、大ていの白人は蹴とばすのに躊躇することもなほほどの者であるが、しかしそれでも彼は、光榮に輝くローマ人も盛名高きギリシヤ人も爲し及ばなかつた偉業、即ち四千年の間を別に衰へもしないで、何うにかドラッグ・オンして來た民衆を代表するものなのである。彼は、その多くの明白な缺陷にも拘らず、長い歴史と、古い文化と、實踐的な生活哲學と、美術及び文藝の傳統とをもち、人類の歴史に眞に類ひ稀れなる事業を爲し遂げた民衆と民族とを代表する。それはすべての社會學者の謎となつてゐる社會的衰滅の問題を、何うにか解決した。生物學上では、それは河南の猶

木人をも含み、すべての蠻族の征服者を吸収したが、これはヨーロッパ人のかつて爲し得なかつたことである。それは他の如何なる民族も比肩し得ざる長い年代に亙る歴史の連続と、廣い地域に亙る文化の同質性を保持し來つた。實踐的試練により、我々は、それが生き残るに適した民族であること、そしてその古い文化は、多くの缺點にも拘らず、生き残る價値をもつた文化であること、を承認しなければならない。

或る點では、四千年に亙る開化された生活は、生理的な容貌の上に若干の痕跡を、そしておそらくは諸君の言ふが如く、幾千かの頹廢の徴候を、殘したのである。巴里の年老いた、遊びに疲れた貴族を見れば、文化的な生活と室内の暮らしといふものが人間にどんな影響を興へるものであるかを容易に首肯させるだらう。今日の英國の希望は、私の意見では、その宗教に存せず、その議會に存せず、實にその戶外スポーツの愛好に存する。數日前のことであるが、或るアメリカ人のフットボールのコーチが、自動車と靜かな生活の影響によつて、一時代前のアメリカの大學生の見事な脚が見られなくなつたことを歎いた、といふ新聞記事があつた。もしかかる變化が一時代のうちに訓練された眼に看取されるとするならば、四千年の間絶えず叩頭

し、『はい、左様でいます』(唯)と言ひ續けて來たことは、また民族の上にも若干の影響を興へたに相違ない。文明化された生活の緊張とは、主として叩頭と、『はい、左様でいます』と言ふことの緊張である。四千年もの間叩頭と『はい、左様でいます』を言ひ續けて居れば、誰れにせよ圓い顔を機嫌させざるを得ないのであるが、私はこれを民族的頹廢の最も不吉な徴候であると考へる。勿論、圓い顔は次に述べるやうに若干有利な點もある。支那で最も開けた地方と思はれる江蘇省では、他の地方よりも容貌が明らかに圓味が多いといふことに一寸注目しよう。その最も目につく印象はおそらく皮膚と毛髪にあるが、それは明らかにまた習慣によつて洗練されたものなのである。支那の婦人の皮膚が概して西洋の婦人よりも美しいといふことには疑ひがない。

或る點では、もし蠻族の血が絶えず混淆しなかつたならば、支那人はおそらくもつとはるかに悪い状態に陥つたかも知れぬ、といふことも承認されねばならない。勿論、人は直ちに背の高い、筋骨逞しい北方支那人と、小型の南方支那人との相違を考へる。支那の歴史は、約五百年間平和と繁榮の時代が續いて、その間に民族が弱くなり、次いで北方の侵略時代が二世紀乃至

三世紀續くといふ、規則正しい周期を示してゐる。漢朝と秦朝の時代の後に、そして支那の民衆が秦朝末期の下らぬ議論と下らぬ生活に没頭した後に、約百五十年に亙る北支那全體の蠻族の侵入があつた。また、唐朝及び宋朝の下における五百年間の平和なそして靜穩な生活の後に、蒙古人の侵入があつた。これらの周期は極めて規則正しいやうである。今日我々の必要とするものは、おそらく新しい蒙古人の血の混淆であらう。何れにせよ、歴史的には、この民族混血によつて最も得をしたらしい北方支那人が、後に王朝の始祖となつたすべての帝位篡奪者を出してゐるのである。南方支那人にしてかくの如き者は一人もなかつた。實際には、すべて之らの帝位篡奪者は、或る限られた地方、即ち隴海鐵道の附近から出てゐるやうである。甘肅省の出身たる唐朝の始祖を除き、大王朝の始祖はすべてこの地方から出た。隴海鐵道の沿線の一點を中心としてその半徑の哩程を定めることは困難ではなからう。漢朝の始祖は沛縣から、晉朝の始祖は河南から、宋朝の始祖は涿縣から、明朝の Chu Hung-wu (朱洪武) は鳳陽から出た。そこで私は、娘を嫁にやらねばならぬ支那の友人たちに對して、婿は隴海沿線からとるべしと忠告する次第である。近代になつても、我が將軍たちは大部分河北、山東、安徽、並に河南、

即ちこれまた隴海線を中心とする地方から出てゐる。山東は Wu Peifu (吳佩孚)、Chang Tsungchang (張宗昌)、Sun Chüanfang (孫傳芳)、並に Lu Yunghsian (盧永祥) を引受けた。河北は Chi Hsiuehyüan (齊燮元)、Li Chinglin (李景林)、Chang Chichiang (張之江) 並に Lu Chunglin (鹿鍾麟) を生んだ。河南は Yuan Shikai (袁世凱) を、そして安徽は Feng Yühsiang (馮玉祥) と Tuan Chijui (段祺瑞) を出した。浙江出身の Chiang Kaishek (蔣介石) は彗星であるが、しかし彼は獨り星である。江蘇は著名な將軍は一人も産んでゐないが、若干の甚だ美男のホテル・ボーイを産んでゐる。

しかしながら、支那の民衆を全體として見れば、これを一の國民と呼ぶにふさはしい文化の同質性が存して居る。支那の民衆は、今日も同様、或る共通の民族的特徴を示してゐる。ここにおいて我々は、支那人の性格の心理的及び精神的側面を述ぶべき場合に立ち至つたのであるが、私の信ずるに、これらの特徴は一部は經濟的なる、一部は文化的なる、歴史的環境の成果である。私は現在文化的成果の方に多くの興味を感ずる。もし私が今日の支那の民衆の主要な性質を、善悪の兩面に互つて擧げるとすると、次の如きものを擧げねばなるまい。即ち(一)

節制、(二)素樸、(三)自然を愛すること、(四)忍耐、(五)無關心、(六)老獯、(七)多産、(八)勤勉、(九)家庭生活を愛すること、(十)快活、(十一)好色、これである。すべてこれらの性質は消極的性質であつて、概して古い文化をもつ古い民族の特徴である。おそろしくこれらすべて老獯といふ言葉で一括され得るであらうが、それは青春の氣魄とロマンスよりもむしろ靜穩で消極的な力を示唆する。これらの特徴の中で、特にドラゴンを想はしめるやうなものは一つもなく、したがつてナポレオンは誤つてゐたわけである。私はドラゴンが特に節制ある、忍耐強い、冷靜な、そして勤勉な動物であるかどうかは不案内であるが、しかしドラゴンが多産を以て名を得てゐるものでないことは知つてゐる。この多産の性質はむしろ天竺鼠を思はせる。そしてまた、そのドラゴンが四千年の昔には勇しい角を生やしてゐたとしても、その角は今日ではすっかり小さくなつて、むしろ大きな面皷を想はすものであることはたしかである。

今、もつとも顯著な三つの特徴、即ち忍耐と無關心と老獯とをとつて、これが如何にして生じたかを検討して見よう。私はこれらは文化的及び社會的環境の及ぼした影響であつて、したがつて必ずしも支那人の心理的構造の一部ではないと信ずる。それが今日存するのは、我々が

四千年の間或る文化的及び社會的影響の下に生活し來つたからである。したがつて生ずる當然の推論は、これらの影響がもしなくなれば、この性質もしたがつて減退もしくは消失するであらうといふことである。概していへば、それは私が支那人として経験したところの、そしてまた支那の社會に人となつた者が誰れでも體驗し得るところの、教育過程である。私も幾分かは忍耐強く、無關心に、そして老獺になつて來た。私の場合にはこの過程は中々容易ではなく、意識的に戦つたのであつたが、それだけにまた自己分析によつて明瞭に見ることが出来るのである。私は、私の経験といふものは支那の社會に人となつた凡ゆる人の経験であらうと信ずる。

私は、忍耐強いといふ性質は主として家族制度から發達し、無關心は主として法律的保護の缺けてゐることに基き、そして老獺は、餘りよい言葉がないのだが、道教的な世觀に基くものであらうと信ずる。勿論すべての結果と原因とは實際には相關聯してゐるものであつて、或る一つの原因がその結果たる或る性質を生むといふのは、ただ敘述を簡明にするために外ならない。

忍耐強いといふことが支那の民衆の美德であるといふことについては、我々を知る者は誰れ

も反對しないだらう。それはもう餘り過剰で、ほとんど缺點にもなりかけてゐる。我々は西洋の民衆の忍び得ないやうな暴政と無秩序と稅政とを忍び來り、これを自然法則の一部と見做し得るかのやうに思はれてゐる。四川省の或る地方においては民衆は一九五五年まで租稅を先取りされてゐるが、別に強い抗議をするでもなく、家庭内で祕かに不平を感く程度である。基督教の忍耐も支那人の忍耐に較べれば短氣に等しいやうなものであり、これは支那青磁の特異さと同じほどの特異さを持つてゐる。眞の個性といふものは寫しがとれないのであるから、世界旅行家は支那青磁と一緒にこの支那人の忍耐強さをも持つて歸つたらよからう。我々は、恰かも小さな魚が大きな魚の口の中に遊いで入ると同じほどの安易さを以て、暴政と稅政に服するのである。もしも我々の我慢能力がヨリ小さかつたら、我々の忍苦もヨリ小さかつたかも知れぬ。しかし事實は、この我慢能力は「忍耐」の名によつて尊いものとされ、そしてことさら儒教倫理の基本徳目に數へられたのである。

私はこの忍耐といふことが民衆の偉大な特質でないと言ふものではない。イエスは、柔和なる者は幸福なるかな、そは大地を嗣ぐべければなりと言つたが、私は支那人の柔和さが大陸の

半分を嗣ぎ、これを維持するを得しめたかどうか、確かには言へない。支那人もまたこれを意識的に最高道徳の一に數へてゐる。諺に曰く、『小事を忍び得ざる者は大事を遂行し得ず』(小不忍則亂大謀)と。

しかしながら、この美徳を發達させるための訓練學校は大家族であつて、そこでは多數の姪と義兄弟と父と子とが、毎日お互ひに我慢し合ふことによつてこの美徳を學ぶのである。各個人が廻を伸ばす部屋をほとんどもたぬ大家族にあつては、誰れもが必要と両親の訓誡とによつて、幼兒の時代から、相互の寛容と人間關係への順應の必要を學ぶのである。深刻に、徐々に、毎日性格に刻み込まれる影響といふものは測り難いものがある。昔 Chang Kungyi (張公一)といふ總理大臣があつて、九世の子孫が一家に生活するといふ此の世の萬福を甚だ羨まれたものである。或るとき唐の高宗皇帝がその祕訣を御下問あつたとき、この大臣は筆と紙を乞うて『忍耐』もしくは『堅忍』といふ意味の言葉を百通りに書いたといふことである。支那人はこれを家族制度の悲劇的な註釋とは解せず、後世つねに彼を羨んで、『百忍』といふ言葉は流行語となるに至つた。

しかし支那の民衆がその忍耐の點において特異であるといふ以上に、彼等はその無關心をもつて知られてゐる。これもまた、私は社會的環境の所産であると信ずる。何故に支那の民衆はこの無關心を發達させたか、そして何故に支那の母親たちは『公共の問題に關與』しないことがよいことだと、よくその子供たちに教へ來つたのであるか？ 私は思ふに、個人の權利に對する法律的保護のない場合には、無關心といふことがつねに安全であり、そして魅力をもつてゐるからである。それは我々の文化の意識的な所産であつて、現状の下において舊時代の智慧が懇篤に教へ込んだものである。さういふわけだから、私は教養ある支那人は誰れでも、新たにこれを學ぶ必要があると信ずる。少くとも私の場合では、それは私個人の進歩であつた。支那の青年は外國の青年と同様、公共精神に燃えて居り、外國におけると同様、『公共の問題に關涉する』希望をもつてゐる。しかし廿五歳から卅歳に至る間に、何時しかことごとく賢くなる、即ち支那語で言へば『學乖了』である。そして、彼等の老熟と教養とに資するところ多大なる、この無關心さを獲る。或る者は生來の才智によつてそれを學び、或る者は一度か二度手を焼くことによつてこれを學ぶ。老人はすべて皆安全に握舞ふが、それは、個人の權利が保

障されず、そして一度手を焼けばそれでもう澤山といふ社會における無關心の利益を、あらゆる老獪をもつて學んだからなのである。

さて私の信ずるに、この無關心は、個人の權利に對する保護のないことから直接生ずるのであるが、これは人が公共の問題、即ち我々の所謂『閒事』(餘計なこと)に餘り關心をもちすぎることを甚だ危険ならしめる。我が最も勇敢なジャーナリストであつた Shao P'iaoping (邵粟平) と Lin Posui (林伯水) が Wang Chi (王琪) 及び Chang Chungts'ang (張鐘倉) に銃殺されると、他のジャーナリストは當然にたちまち無關心の徳を學び、そして『賢くなる』のであつた。支那的の意味でいへば、彼等は教養されたのである。幾らか以前のことであるが、或る人が私に、何時になつたら支那人はデモクラシーの準備が出来るだらうと訊ねたことがある。私のそれに対する答へは、我國の官吏は何時でもデモクラシーの準備があり、また我が民衆もしかり、といふのであつた。我々の個人的權利を侵犯し、人を裁判なしに死刑に處する支那の官吏が何時でもデモクラシーの準備があり、自己防衛のため法廷に出頭するとすれば、その犠牲者側の關係者たちが一夜のうちにもた、その官吏を法廷に訴へるだけのデモク

ラシーの準備が出来るといふこともたしかであらう。しかしながら、この權利が保護されてゐない場合には、我が舊時代の智慧は、無關心が個人的自由のための最良の憲法的保證であることを教へるのである。

言葉を換へれば、無關心といふことは高尚な道徳ではないが、法律的保護がないことにより必要となつた、社會的態度なのである。それは恰かも、龜がその龜甲を發達させたと同じ自己防禦の形式である。このことは、法律的保護に依頼しない支那の盜賊と匪賊がこの無關心さを少しも發達させず、却つて我々の知る限り最も公共精神の旺盛な、義俠的な階級であるといふ事實によつて證明される。『豪俠』といふ支那の騎士道は、小説水滸傳によつて最もよく代表されてゐるやうに、つねに必ず盜賊と結びついてゐる。即ち、強者はその力あるが故に公共精神に富み、民衆の大部分を成す弱者は、自己保存の必要あるが故に無關心となるのである。

歴史上、これは魏朝及び晉朝の歴史において最も顯著に證明されてゐる。即ち當時、學者は國事に無關心なるが故に尊敬されたのであるが、その結果は間もなく國力の衰退となり、蠻族の北支那征服となつた。國事に無關心となり、酒を飲んで清談に耽り、道者の仙夢を追ひ、そ

して不老不死の丹薬を探求する、といふのが魏朝及び晋朝時代の學者の流行であつた。この時代は周漢時代以後において支那民族の最も低調となつた時代のやうであつて、我が歴史上はじめて蠻族の支配に服するに至るまで續いたところの、民族の漸次的退化の終末を現はすものであつた。この無關心が自然的なものであつたにせよ、またさうでなかつたにせよ、それは何故に生じたのであるか？ 歴史はこれを明瞭なる言葉をもつて我々に語る。理由は明らかに、法律的保護の存しないこと、並に政治に關心をもつことの危険なることであつた。

東漢時代の終り頃は、支那の學者は無關心ではなかつた。事實、政治上の批評はこの時代に高潮に達した。一流の學者と三萬を數ふる學徒は、しばしば時事政策の諸問題について論争し、政府の行爲に對する勇敢なる攻撃によつて宦官及び皇帝の怒りを買ふも意に介しなかつた。しかるに憲法上の保護を缺いてゐたが故に、この運動は宦官の手によつて完全な失敗に歸せしめられた。二百人乃至三百人の學者、並に時としてはその家族全體が、死罪、流罪、または禁獄に處せられた。この事件が起つたのは紀元一六六年—一六九年の間であつて、それは『黨錮の禍』といふ名で知られてゐる。そのやり方は極めて徹底的、かつ極めて大規模であつたので、

すべての運動はこれによつて中斷されてしまひ、しかもその餘威は一世紀以上の後にまで及んだ。次いでこれの反動が來り、無關心の風潮と、並に酒と女と詩と仙夢とへの狂態が始つた。學者の或る者は山に入り、出入口のない泥の小屋を建てて、死に至るまで窓から食物を入れてもらつた。また或る者は樵夫に身をやつし、その親族に乞ふに、訪ふことによつて人の目に觸れざらんことを以てした。竹林の七詩人、もしくは七星なるものの現はれたのはその直後のことであつた。大詩人 *Liu Hsiang* (劉伶) は酒に酔ふこと數月に互つた。彼は酒の瓶とショヰメルと一人の墓掘男を携へ、車に乗つて旅をするを常とし、墓掘男には『自分が死んだら——何時、何處であらうとそこに自分を埋めよ』と言ひ渡してあつた。人々は彼を讀へ、これを『賢人』と呼んだ。學者といふ學者はすべて、極端な田夫漢を装ふか、左もなければ極端な醉態と極端な浮薄を装つた。今一人の大詩人 *Kuan Hsien* (阮咸) はその下婢と不義の關係をもつてゐた。或るとき宴席に列してゐる時、彼の妻がその下婢を追ひ出したと聞くや、彼はその場で客の一人から馬を借りてその下婢を追ひかけ、終にすべての客の面前でこれを馬の背に乗せて連れ歸つた。かういふのがその賢を讀へられるに至つた人々なのである。民衆は、恰かも小

龜が大龜の厚い甲羅を讀へるが如く、これを讀へたのであつた。

さてはや、支那人の老獺の起源について詳しく論ずる時間がない。これもまた、教養と老齡との所産である。或る人は、四十をすぎた男は誰れでも惡黨だと言つてゐる。何れにせよ、人は年をとるにつれて恥知らずになるといふことは、否むべからざる事實である。二十の娘にして金を目的に結婚するものは稀れであるが、四十をすぎた女にして金より外のものを目的として結婚するものは稀れである。希臘神話に、若いイカルスは餘りに高く飛びすぎて翼の蠟が溶け、そして海に落ちたが、老父デダロスは極めて低く飛んで恙がなく故國に歸つたとなつてゐるのは、決して單なる出鱈目ではない。人は年をとると低く飛ぶ才能が發達して來るのであり、そして理想主義は冷靜でかつ平凡な常識と、並にボンドやシリリングに對する感覺によつて和げられるのである。しかりとすれば、恰かも理想主義が青年の特徴である如く、リアリズムは老人の特徴である。人が四十をすぎて惡黨にならないとすれば、彼は心身耗弱者か、左もなければ文學上の天才である。この後者に屬するのがトルストイ、ロバート・ルイス・ステイヴンソン、ならびにサー・ジェームズ・バリー⁽²⁾のやうな『偉大なる小兒』であつて、彼等は天

性の真心をもつて居り、それが體驗と相俟つて、我々の不老不死と呼ぶところの永遠の青年たる能力を彼等に與へるのである。

さて、個人におけると同じく、國民についてもまたしかりである。アメリカの婦人は、大人でもシェミーズを着て膝をガタガタ震へさすのがお好きであるが、これはアメリカの國民が若いからである。支那の青年は落ちついてゐて用意周到であるが、これは我が國民が老國民だからである。私が老獺といふのは、高遠な理想主義を不能にし、生活の空虛さを嘲り、そしてすべての人間の行爲を消化器管といふ單純な水準またはその他の單純な生物的要求に還元してしまふやうな性質を謂ふのである。孟子は偉大なる老獺漢であつて、人類の主たる欲望を食物と女、即ち榮養と再生産の二つに還元した。故人となつた大總統 Li Yuanhong (黎元洪) もまた老獺漢であつて、支那の政治問題の解決方策として『飯米がある場合は凡ゆる人に食べさせよ』(有飯大家吃)といふ、心から歡迎された方式を聲明したのであつた。大總統黎元洪は自ら知らずして恐るべきリアリストであつたのであり、そして彼が支那現代史の經濟的解釋をこのやうに與へてゐたとすれば、彼の言は彼の知識以上に賢明であつたわけである。歴史の經濟的解

釋といふことは支那人にとつては新しいものではなく、またエミール・ゾラ派の所謂人生の生物學的解釋といふことも同じである。エミール・ゾラにとつてはそれは知的な氣紛れであるが、支那人にとつては國民心理の問題である。人はリアリストたることを學ぶ必要はない。支那においては人は生れながらにしてリアリストなのである。大總統黎元洪は別に腦の働きの優れた男ではなかつたが、しかし彼は一人の支那人として、すべての政治問題が飯米の問題に外ならず、またさうでなくてはならないことを本能的に感知したのである。一人の支那人としてなればこそ、彼は私の曾つて聞いたことのない最も深刻な、支那の政治に關する解釋をこのやうに與へたのである。

さてこれは、老人と老國民とだけが到達し得る、甚だ抜目のない人世觀である。諸君の中の二十五歳以下の人はまづ私の意見に贊成しないだらうが、二十五歳以上の人はその本質的な眞實さと健全さを承認されるだらう。しかるにすべてこれは、理論においても實際においても純然たる道教なのである。私は諸君が、老子の道德經五千語以上に、老獯なる人生哲學の深遠なる集積はないといふ私の意見に贊成せられると思ふ。而して私はまた、老子はその名の示す

通り老人であつたといふことを諸君に想起していただき度い。支那人は、教養によつて儒教の徒たるより以上に、天性によつて道教の徒なのである。道教は、その理論と實際において、若干老獯なる超脱であり、恐るべき頽廢的な懷疑主義であり、すべての人事關涉の無益さと、すべての人爲的制度即ち法律、政府、並に宗教の缺陷に對する嘲笑であり、そして若干理想主義に對する不信であるが、これはエネルギーの不足によるものではなくてむしろ信仰の不足によるものである。

國民としては我々は帝王法典を制定するほど偉大なのであるが、しかし我々はまた、法曹家と法廷とを信頼しないほどにも偉大なのである。法律的な紛争の九五パーセントは法廷外において解決される。我々は儀禮の典則をつくり出すほど偉大なのであるが、しかし我々はまた、これを人生の大いなる惡戯の一部と見做すほどにも偉大なのである。我々は邪惡を攻撃するほど偉大なのであるが、しかし我々はまた、それに拘泥しないほどにも偉大なのである。我々は、大學において、政府を如何に運用すべきかといふ政治學の學課を青年に教授するのではなく、市政府、省政府及び中央政府が現實に如何に運用されてゐるかといふ日常の事實及び實例によ

つて彼等を教育する。我々は、空論の神學に我慢が出来ないと同様、非實際的な理想主義にも用がない。我々は青年に神の子の如くあれと教へるのではなくて、正氣の人間であれと教へる。私が、支那人は本質的にヒューマニストであつて、基督教は支那においては成功せず、もしくは、容認されるに至るには徹底的に變貌されねばならないと信ずるのは、これが故である。基督教の教訓の中で支那に根づくと思はれる唯一の點は鳩の如く温順に、だがしかし蛇の如く賢くあれ、といふ基督の誠しめである。その限りでは支那人はことごとくも既に基督教の徒である。といふのは、これこそ老獪さの屬性なのであるから。

一言にしていへば、我々は人間の努力の必要なることを認めるが、同時にまたその無益なることをも容認する。この一般的な心構へは、ややもすれば受身の防衛戰術を發達させ易い。『大事は小事と化し、小事は無と化し得る』(大事化小事小事化無事)。この一般原理に立つて支那人のすべての争論が解決されるのであり、支那人のすべての企畫が立案されるのであり、而してすべての改革綱領は、各人に平和と飯米とが保證されるに至るまで、餘りあてにされないものである。『一動は一靜に如かず』といふ格言があるが、これは『人の邪魔をするな』とか

『眠れる犬をおこすな』といふと同じ意味である。したがつて人間の生活は、最少の争闘と最少の抵抗の線に沿うて動く。これは一種の平靜なる心境を發達させ、人をして無禮を忍び、天地と和合するといふ氣持を起さしめる。それはまた一種の受身の防衛戰術を發達させるが、これは如何なる攻勢戰術も及ばざる、恐るべきものとなり得る。諸君がレストランへ入り、空腹を感ずるが料理はなかなか來さうにないとするれば、諸君はもう一度ボーイに注文を命ずる。もしそのボーイが無作法であれば、諸君は黙つてゐないでマネジャーに抗議するだらう。しかしもしそのボーイが極めて慇懃な態度で『ただ今、ただ今』と答へながら、しかも料理が來ないとすると、諸君もまた慇懃な態度で、祈るか咀ふかする以外には全く方法がなからう。つまりこれが支那人の受身の力、即ち最も強く感ずる者が最もよく認めるところの力である。それは即ち老獪の力である。(一九三一年三月二十七日カセイ・ホテルに催された汎太平洋協會午餐會における講演)

(1) Robert Louis Balfour Stevenson (1850—1894) 「寶島」その他の作者

(2) Sir James Matthew Barrie (1860—) 英國演劇界の第一人者